

ンド富士」のひとつとして紹介されたナウルホエ山の写真が、山梨県側からみた富士山にそっくりだと感じた。読者の皆さんはどの富士が、本家によく似たものとお考えになるだろうか。

(高橋重雄)

伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比古・林 琢也・鈴木晃志郎編：『役に立つ地理学』古今書院，2012年4月刊，162p.，2,600円（税別）

「地理学者はいまだ、そう名乗るたびに県庁所在地を問われ、地理学と高校地理の違いについて説明を求められている」というまえがきの記述に、苦笑を浮かべつつも思わずうなずき、やがて小さなため息をつく。本書を読み始めた評者自身の顔を想像してみると、おおよそこんなところだろう。とはいえ、地理学を専攻した方々ならきっと誰でも、似たような表情を浮かべてしまうのではなかろうか。本書は、このような状態を何とか打破しようと立ち上がった、編著者5人の若手地理学者をはじめとする研究者たちによる力作である。

本書は、2部構成の形式を取る。第1部では、8人の若手地理学者らが、自らの研究を事例として専門とする地理学分野について紹介し、それが社会の様々な問題にどのように寄与しうるかを議論する。第2部では、5人の他分野の研究者らが自身の研究分野の視点や方法、研究成果などについて述べた上で、これらに対して地理学はどのようなアプローチが可能であるのか、あるいは、地理学からどのような分析・提言がなされることを期待するか、といった内容が記される。

第1部の「第1章 地図学者からのアプローチ」では、地図は単なる現実世界の描写にとどまらず、作り手の価値観やメッセージが色濃く反映さ

れたものであることが指摘される。広島県福山市鞆の浦では、港まわりの埋立架橋をめぐる、日常生活の利便性向上を求める賛成派と、観光名所としての景観保全を求める反対派が対立した。そこで著者は、GISを援用して鞆の浦に関する複数の観光案内図を分析した結果、観光案内図に描かれる場所は鞆の浦の特定地域に集中していた。すなわち、架橋問題が発生している港まわりが観光圏として認知・描写され、それ以外の場所は地図から外されていた。このように、地図の分析を通じて、作り手の意図や地理的な駆け引きを明らかにできることが示されている。

「第2章 経済地理学者からのアプローチ」では、サービス産業の成長と経済のグローバル化の空間的展開について、労働者派遣業の発展を事例に論述される。労働者派遣業は、その全国的拡大とともに、様々な案件に対応できるよう、次第に専門職派遣から非中核労働者の派遣へと比重を移していき、これとともに地域の労働市場では正規雇用から非正規雇用への転換が進んだ。また、労働者派遣企業の拠点となる事業所は、企業イメージ向上のために都市の最新鋭の高層ビルに置かれる傾向にあった。個々人の生活や意思決定、企業の動向は複雑であるが、その一般的特徴を見出すとともに、経済的な合理性だけは説明しがたい部分を、空間的な制約に関する考察を通じて解明することの重要性を著者は指摘する。

「第3章 商業地理学者からのアプローチ」では、スーパー等の大型商業施設（大型店）の立地動向がどのように変化し、地域経済に影響をもたらすのかについて述べられる。経営や流通システムの変化、また政策や都市構造の変化を受けて、都市の中心市街地に集中していた大型店は次第に周辺市街地へと移動した。これにより、地域には複数の商業集積が形成され、消費行動も郊外に拡散するという都市空間の変化が起こった。今後は、

他の研究分野の知見もふまえて、条件の異なる様々な地域において、商業が人々の生活にもたらす影響や社会的意義を見直し、かつ見出すことが重要であると著者は強調する。

「第4章 都市地理学者からのアプローチ」では、ジェンダーの視点を導入しながら、東京圏における居住地選択からみた都市構造の変化が示される。居住地選択には、世帯のライフステージの進行が大きく影響するが、従来注目されていた夫(男性)の意思決定だけでなく、自宅近隣の認識の高さや地元への愛着の強い妻(女性)による意志も反映されており、夫婦の性的役割分業が郊外部での居住地選択に密接に関わっていることが示された。今後は、シングル女性や共働き世帯など、世帯構成が一層多様化することが見込まれ、彼(女)らの意思決定によって都市構造はさらに変化することが予期されている。

「第5章 観光地理学者からのアプローチ」では、近年、社会的関心が高まる観光について、伝統的建造物群保存地区の町並み保存活動を事例に論考される。ここでは、様々な社会的立場のせめぎあいによって場所の意味が構築され続ける構築主義、マンションなどの高層建造物と歴史的建造物が混在する景観問題、文化遺産が持つ本物の芸術性や歴史的価値を維持するオーセンティシティ(真正性)の問題など、様々な課題が存在する。また、観光を単なる物見遊山で終わらせるのではなく、地域の特性や伝統を住民も観光客も生かしたオルタナティブ・ツーリズムとして発展させようとする動きもある。身近な地域の魅力発見や地域資源の活用は、今後一層重視されることが予期され、現地での詳細なフィールドワークを得意とする地理学が果たす役割は大きいと著者は期待する。

「第6章 行動地理学者からのアプローチ」では、人間の移動や行動パターンと空間利用の関係

が述べられる。著者が実施した上野動物園を対象とした調査からは、来園者の属性によって園内を巡る行動には差異がみられ、空間の利用の仕方が異なることが見いだされた。さらに、多摩動物園との比較によって、来園者の属性が上野動物園の場合と同じであっても、場所が異なれば行動の特徴にも差異が生じることが示された。これらの知見を、インフラ整備や情報提供の方法等に関する政策立案などにも応用できる可能性が指摘されている。

「第7章 農村地理学者からのアプローチ」では、農産物や農村景観を観光資源とした地域振興のあり方について論述される。日本有数のサクランボ産地である山形県寒河江市においては、既存の流通システムと、アグリ・ツーリズムによる観光農園や直売などの市場外流通が両立され、産地が維持されている。この背景には、組合による組織的な観光客対応や、栽培技術の継承・共有による高品質なサクランボ生産がある。これにより、地域内に居住する農家の合意形成が生まれることで、良好な農村環境というイメージが演出・商品化されるプロセスが、現地でのフィールドワークによって明らかにされている。

「第8章 歴史地理学者からのアプローチ」では、過去の自然環境や景観の復原だけでなく、過去の様々な災害(歴史災害)を復原することで、今後の災害予測に結びつける視点が提示される。例えば、1703年元禄関東地震について、海岸段丘や海岸侵食の調査や、古文書・絵図などの史料および現在の地形図をもとにした分析の結果、地震による地形の変動や、それによる人々の生活への大きな影響が明らかにされた。東日本大震災発生以降、大地震や津波への対策が全国各地で検討されるなかで、本章の分析手法は早急に社会還元されるべきであろう。

第2部では、まず「第9章 生物学からみた地理

学]において、生命現象を直接引き起こす物理的・化学的メカニズム(至近要因)や、生物の進化そのものの究極的・根源的なメカニズム(究極要因)を分析する生物学の視点が示される。こうした変化や多様性の起源を解明する視点は、生物学にも地理学にも共通すると著者は指摘する。また、人間の活動や意思決定に影響を受ける生命現象の解明は生物学のみでは困難であり、地理学をはじめとする社会科学的手法との融合が重視されている。なお、本章の冒頭では、自然科学全般に関する簡潔な紹介が記されており、第1部の(人文)地理学に関する記述から頭を切り替えることができる。

「第10章 土壌学からみた地理学」では、近代土壌学において、土壌が気候や植生の影響を受けて生成されるという概念が提示され、この背景には地理学的考察が加味されたことが記される。その後も土壌の分類法は現在に至るまで精緻に議論され続けているが、自然資源の利用など、人間の諸活動と土壌との関係性を分析するうえでは、農地などの土地利用に関する意思決定の影響や、土壌の空間的な広がりに関するGISによる大容量データベースの構築・活用といった地理学的視点の導入が、今後も重要であることが述べられる。

「第11章 環境倫理学からみた地理学」では、環境問題に対する人間社会の倫理観について、いくつかの主たる論争が冒頭で紹介される。こうした論争は決着をみるにはいたっておらず、その諸相は例えば、地域の風土や場所、景観などに対して様々な価値観が存在することからも明らかである。この状況に対して、その地域に関係する人々の「合意形成」を助ける上で、地域を丹念に調査・分析する地理学の重要性が強調される。ただし現時点では、こうした現場に地理学者が欠落している(あるいは、存在感が薄い)という手厳しい指摘も記されている。

「第12章 環境経済学からみた地理学」では、これまでの環境経済学において、前提とされる市場取引に環境問題による影響が含まれないという外部性の問題や、環境問題を社会的費用として公正な負担を検討する議論などがなされたことが述べられる。その上で、環境問題には「問題の多義性」と「方法論の多義性」という2つの課題が存在し、学際的なアプローチが常に必要であることが指摘される。著者が関心を向ける水問題の場合、地理学は先駆的に実態研究を積み重ね、環境経済学の発展にも寄与したが、一方で法制度を介した人間と自然との関係についての言及は少ない。過去の環境問題や環境政策を地理学の視点から検討し直すことなどを通じて、双方の学問の接近が重視されている。

「第13章 法律実務家(紛争解決分野)からみた地理学」では、社会において自由や権利が保障されているほど意見の相違や利害の対立が生じ、紛争の発生とその解決が求められることが記される。著者は、ナラティブ・アプローチの観点から、個人が自己の物語を持ち、その危機の克服を手助けすることが紛争解決であるとする。そのためには、紛争をめぐる場所や空間に関する理解が必須であり、人々の置かれた環境や経済、文化、生活などの様々な状況に関連する地理的要因の分析が重視される。その上で、具体的な紛争解決の事例が挙げられ、その1つ1つで地理学が寄与する項目について詳細に列記されている。

第2部の論考は、地理学を専門とする研究者にとって新鮮な指摘であり、示唆に富む。それゆえに、異なる専門分野に属する研究者が自身の研究と地理学との接点を模索し、それを読者にわかりやすく記述するという作業には、ときに頭を悩ませることがあったかもしれない。そうした難題をクリアし、本書のオリジナリティを大きく引き上げた第2部の5人の著者たちに、評者も一地理学

者として敬意を表したい。

なお、上記のほか、第3・5・8・13章にはコラムも存在し、それぞれの分野における最近の動向などに関する平易な説明がなされ、関心を一層喚起させる。

一方で、2点ほど評者からの注文も記しておきたい。1点目は、編著者らもまえがきで触れていることではあるが、地理学からのアプローチの中に自然地理学者からの論考が存在しないことである。他分野からのアプローチには、生物学や土壌学、環境問題を主に扱う研究テーマが多いことを考えれば、これらの研究分野との関連性が人文地理学と同等以上に高いと思われる自然地理学者からのアプローチがやはり欲しかった。

2点目は、他分野からのアプローチを受けて、地理学がなしうることは何なのか、他分野と共通する問題の所在はいかなるものか、といった事柄について、最後の論点整理が欲しかった。他分野からのアプローチを読み進めるにつれ、それらの研究分野の魅力が次々と伝わってくると同時に、こうした研究諸分野に地理学はかくも多くの示唆や貢献を与えることができるのか、という驚きや高揚感を覚えずにはいられない。この熱が冷めないうちに、編著者によるもう一押しがあれば、本書から得られる知見は一層まとまったものになったように思える。尤もこれは、論点整理を読者自身が行ってこそ、という編著者らの期待や熱望によって、あえて記されていないのかもしれない。

いずれにせよ、評者によるこれらの注文は本書の価値をいささかも損なうものではない。むしろ本書で取り上げられた地理学研究の動向は、いずれも新鮮な内容であるがゆえに、論述に対する異なる視点の提示や詳細な意図を正したい地理学者も少なからず存在するかもしれない。しかし、専ら地理学のなかで本書を批評することは、本書の意図とは異なるし、本書が目指す高見を遠ざける

ことにすらなりかねない。むしろ、一人でも多くの他分野の研究者へ本書を紹介し、こうした研究者に地理学の存在を再確認してもらうこと、そして分野をまたいだ研究プロジェクトを1つでも多く作り出していくことこそが重要であろう。そして、この動きによって、編著者らの優れた能力が一層引き出されることが期待される。ぜひ一読をお勧めするだけでなく、読後は本書の存在を知らない地理学以外の方々にお声かけいただくところまでを切望する一冊である。

(淡野寧彦)

平岡昭利著：『アホウドリと「帝国」日本の拡大』  
明石書店、2012年11月刊、279p., 6,000円(税別)

地理学のロマンとは何だろうか。中学校や高等学校の地理教科書や地図帳をながめていると、日本の領域が、国土面積に比して東西にも南北にも広がっていることに気づく。評者も小学生の時分、日本の領域を地図上で着色して、日本が予想以上に拡がりをもつ国であることに驚いたものだ。さらには大日本帝国の領域を現在の日本の領域と重ねたとき、日本(人)はどうして、これらの地域に進出(侵略というべきかもしれない)していったのか、不思議に思った記憶がつい先日のごとくのようによみがえる。鳥島の名称がアホウドリに由来することは認識していたが、最東端の南鳥島、最南端の沖ノ鳥島をはじめ、「鳥島」系の名称をもつ離島が数多くあることに疑問をさしはさむことはなかった。

評者がもし地理学のロマンを問われたならば、迷わず「探検」と答えるだろう。未知なる土地(テラ・インコグニタ)を求めて、海洋にあるいは内陸部へと探検を進めた人間の探究心、冒険心こそが地理学の原点にあるのだと思う。それはしばし